

尋常
小學
國民修身篇
壹

檢定申請本
K1201
46
2

K120.1

46

2

井上哲次郎校閱
赤沼金三郎編纂

尋常
小學
國民修身篇

版權所有

勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツ
ルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一
ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシ
テ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ
友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及
ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ
進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ
一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶

井上哲次郎校閱
赤沼金三郎編纂

尋常
小學
國民修身篇

成務所有

勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツ
ルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一
ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシ
テ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ
友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及
ホシ學ヲ修メ業ヲ習フ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ
進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ
一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶

翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラ
 ス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン
 スノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱
 ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施
 シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニ
 センコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名 御璽

小學常 國民修身篇卷一

井上哲次郎 校閱
 赤沼金三郎 編纂



第一課

忠 孝

孝は、
 百行のもとにして、忠は、
 萬善のかしらなり。人の行、
 忠孝よりおもしろきはなし。

すべて の 善行 は、みな 忠孝 の
 心 より いで、忠孝 の 心 は、
 一 の 誠心 より いづ。
 父母 に つかふる 誠心 を うつして
 君 に 事ふれば、忠良 の 臣民
 と なり、君 に 事ふる 誠心 を
 移して 師 に 事ふれば、順良 の
 生徒 と なる。

順良 なる 生徒 は、師 を 敬ふ
 こと、君 を 敬ふ が ととく、學校
 を 愛する こと、國 を 愛する
 が ととし。
 忠良 ある 臣民 は、君 を 尊ぶ
 こと、父母 を 尊ぶ が 如く、國
 を 愛する こと、家 を 愛する
 が 如し。

忠孝 は、その 名 を 二 に すれ
ども、その 心 は、二 に あらず。
ゆゑ に、「忠臣 は、孝子 の 門
より 出づ。」と いへり。

第二課

小楠 公 の 忠孝
楠 正行 卿 は、正成 卿 の 嫡子
なり。 延元 元年、正成 卿、朝敵

せいばつ の ため、攝州 に 下り
ける とき、正行 卿 が 十一歳
にて、供 したりける ぞ、思ふ やう
あり とて、櫻井 の 宿 より、河内
へ かへしけり。

この とき、正成 卿 は、正行 卿
と ちかく よびよせ、いひける やう、
「今度 の 合戦 は、うちトに の

かくと なれば、
 余 の、 汝 と
 見ん こと、 今日
 と かぎり と
 思ふ なり。 され
 ど、 わが なき
 あと も、 忠義
 の 心 と わする



べからず。 これぞ 汝 が 第一
 の 孝行 なる。 と なくく
 いひふくめて、 たがひ に わかれけ
 り。

かくて、 正成 卿 は、 間 も なく、
 湊川 にて いちまよく 討死 とける
 が、 正行 卿 は、 よく 父 の と
 しへ と まもり、 母 の いましめ

に 従ひ、あろぶ にも 朝敵 せい
ばつ の まね を なし、忠義 の
心 を はげましけり。

正行 卿 は、成長 の 後、若ばく
賊軍 を やぶりける が、正平 三
年、賊 の 大軍 せめ來りし とき、
一族 うちつれ、三千人 を ひきま
て、四條畷 に すゝみ、敵兵 八萬

人 と 戦ひ、敵 あまた ころして、
弟 正時 と とも に いさましく
討死して、かぐはしき 名 を 千代
に とゞめけり。この 時、正行
卿 は、わづかに 二十二歳 なり
き。その 辭世 の 歌に
かへらト と、かねて おもへば
梓弓、なき 數 に 入る 名

とぞとむる。

第三課

孝行

父母は、我を生子、我をそたて、
たまふのみならず、あけてくれ、我
をとしへ、その身をわすれて、
我を愛したまへり。

父母の恩は、海よりもふか

く、山よりも高し、その恩
にむくいんと思へば、天の
きはまりなきがごとし、子たる
ものいかでか孝養の心を
わするべき。

孝養の心あつきものは、何事
も、父母のおふせにそむかず、
その心となくため、わが身

せ つゝしみて、父母に心配を
 かけぬやう、心がくるものなり。
 父母を愛する心、内にふかく、
 敬ふかたち、外にあらはるゝ
 せ、孝子とはいふなり。
 孝子は、父母のため、力をせし
 ます。はたらきて、わが身は、
 うゑこゝゆるとも、父母の養

せバ かゝぬやう、心がくるもの
 あり。

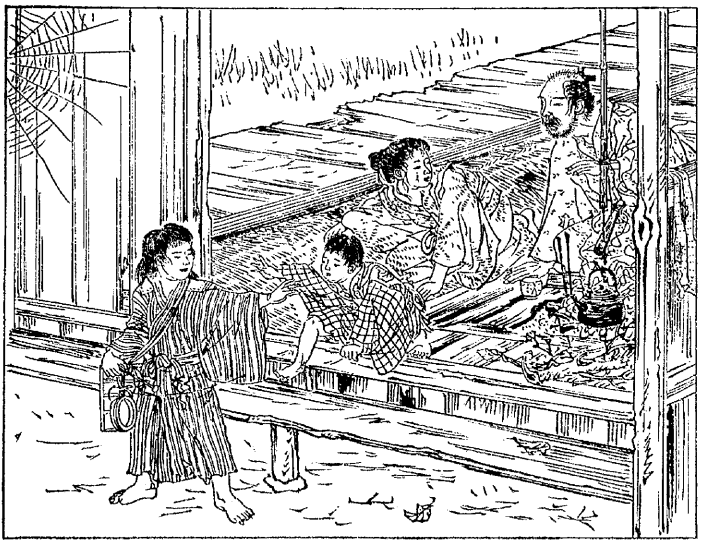
第四課

孝子 藤岡 嘉一郎 の 話

むかし、因幡の國に、藤岡 嘉一
 郎といふものあり。うまれ
 つき 孝心ふかく、よくその父母
 に事へて 孝養を つくしけり。

嘉一郎 七歳の時、その父、眼病にかかりて、盲となりしに、母は、夫をすてゝ、その家せさりしかば、嘉一郎は、父の看病のかたはら、毎日、近き村より、飴をかひきたりて、これせうり、わづかなるまうけにて父せやしなひ、五歳なる

妹と三歳なる弟とをそたてけり。嘉一郎の、十一歳となりしころ、妹は、人によとはれ、その給金せ兄に



おくりて、くらしの たしまへを
 なし、弟は、兄を たすけて、父
 の 病苦を なぐさめければ、父
 も 三子の 孝養を よろこびて、
 其 病苦を わすれ、毎日、わらト
 せ つくりて、これを うり、やすく
 その 日をおくりし とぞ。

嘉一郎、七歳の身をして、みづー

から かせぎて、三人をして 養ひし
 にくらぶれば、吾等が、父母とも
 についがなく、日々、學校に
 いづることをして 得るは、いか
 なる 幸ぞや、これをして 思ひて、
 つねに、孝養の心を せよとたる
 まどき こと あり。

第五課

順良

師 は、父母 に かはりて、吾等 と
 教へたまふ もの なれば、師 に
 事ふる こと、親 に 事ふる が
 如く、かほかたち を やはらかに し、
 かりそめ にも いつはる こと なく、
 行 を つゝしみ、心 を 正しく
 すべし。

生徒 たる もの は、師 を うやま
 ひて、その 教 を まもり、何事
 も その おほせ に 従ふ べし。
 よく 師 に 従ふ ときは、學問
 に 上達して、その 身 の 幸 を
 得 べし。
 生徒 たる もの は、みづから へり
 くだりて、心 を むなしくし、師

の教をうけては、其至極
 とつくさんと志して、一つの
 善を見ては、これに従ひ、一つ
 の義をきいては、これを行ふべし。これを順良の
 生徒といふなり。

第六課

徐積の順良なりし話

徐積は、安定先生の門人にて、
 行をばはけまし、徳を立てし
 人なり。積はトめて先生に
 まみへしとき、頭のかたち
 すこしかたむきたれば、先生、聲
 をばはけしくして「頭のかたち
 をまほくせよ。」といましめられ
 けり。

積 この心を

おしひろめて、此

教は、ひとり

頭のことのみ

にかざるべか

らず、心の上

も、またかく

のととくなる



べしとおもひ、工夫せしゆゑ、
それより後、よこしまなる心、
あらざりしとぞ。

かくのととく、ふかく師の教
どきはめて、これをまよるもの
は、一つを聞きて二つを知る
といふ。かゝる人は、何事
もよくなしとけらるべし。

友愛

兄弟は、同ト父母より生れ、同ト
 乳とのみ、同ト家にそたち、
 一身分躰のものなれば、あたか
 も五指のあひつらなれるが
 如し。

兄弟は、たがひにあひたしみて、

兄は、弟を あはれみ、弟は、
 兄に したがふべし。

事なきときにあたりては、兄弟
 の たふとき こと を 思はざれ
 ども、一たび かんなんに あふ
 ときは、うれひを わかつ こと、
 兄弟に しくもの なかる べし。
 古歌に

春日野の、はらからこそは、世
 の中の、うき田の、もりの、
 なげきせもとへ。

第八課

毛利元就の子をいま
 しめし話

毛利元就、年老いて病みける時、
 其子三人を枕もとによび、

三本の矢を
 つかねて、これ
 をせれと云ひ
 ければ、三人の
 子は、代るく
 こゝろみたれども、
 なかくに折れ
 ざりけり。元就



さらに一本づゝ折らしめければ、皆 たやすく折りぬ。

元就、三人に向ひて云ひけるやう、

「汝等の、仲よくして、力を

あはすると、しかせざるとは、

此矢の、折れやすきと、折れ

がたきとの如し、よくつゝし

みて、必ず忘るゝことなかれ。」

と云ひ終りてうせけり。

その後、三人の兄弟は、よく

父の遺言をまもり、心を

かなへて、互に助けあひければ、其

家なぐくさかへけり。

第九課

親切

人とまとはるには、親切をむね

とし、心のまことより愛し
うやまふべし。

同ト學校の生徒、同ト級の

朋友は、兄弟の如きもの

まれば、ことに、あつく親切を

つくすべし。

我より、人に親切を盡せば、人

も、われに親切を盡すもの

なり。

人と愛し、物をあはれみて、禽獸

にいたるまで、なさけおかくとり

あつかふべし。

人の、われになすとき、わが

よろこぶことと人になせば、

人もまた喜ぶものなり。

人の、我れになすを願はざる

ことは、人になすことなかれ。

第十課

小學生徒の親切なりし

話

ある小學校に、太郎といふ小兒ありけるが、病にかゝりて、ひさしく學校を休みけり。
一日、同級生の一人、花をおく

りて、太郎の病をみまはんといひければ、同級生は、のこらす同意しけり。

かくて、午後には、各花一枝づゝもち來りて、うつくしくこれをつかね、めいく名ふたをしたため、學課のそはりしをち、年のたけたるもの二人を使

として、太郎の
家へみまひ
につかはしけり。

太郎は、久しく

学校の友と

わかれ、病に

なやみけるが、

思はず同級の



ものより、うつくとき花と澤山
もらひければ、大に喜びて、半日、
二人の友とあそび、その夜
は、つねになくやすくねむり
けり。

太郎の両親は、ふかく同級生
の親切にかんじ、翌日、学校
におもむき、教師にあひて、

なみたをながして、あつく禮
 どのべければ、教師は、はづめて、
 このことと知り、生徒一同
 とあつめ、感涙をながして、この
 美行をほめたりとぞ。
 親切は、心のまことにありて、
 品物の多少にはよらぬもの
 なれば、一枝の花にてても、心

の誠よりおくれび、よく人を
 感せしむべし。されば、いかに
 まづしき人なりとも、親切の
 行をば、なし得らるゝものなり。

第十一課

愛校

學校をば、わが家と思ひ、つね
 に、學校のためをはかり、

苦勞をいとはず、學校のため
にはたらくべし。

つねに、學校を愛して、その
名をめぐるやう心掛け、智
ととき、徳をやしなふべし。

今日、學校の名をめぐるもの
は、成長の後、國のため功
を立て、國の光をかゝやかす

べし。

今日、學校のためにはたらく
ものは、成長の後、國のため
はたらきて、忠臣とよばるべし。
吾等は、成長して二十歳に
至れば、
みな兵士となりて、わが國
をまもるべし。
わが身をわすれて、わが國を

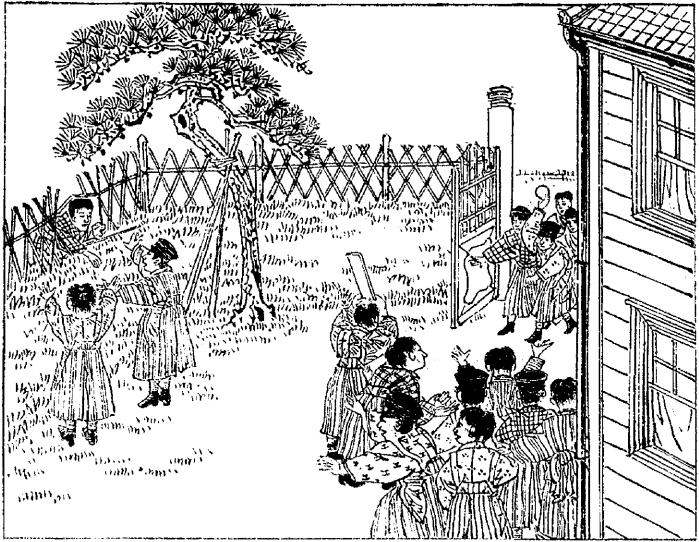
守り、君のため、世のため、わがいのちをすつるは、わが身のほまれなり。

第十二課

小學生徒の學校を愛せし話

ある小學校の生徒等、あまた學校の庭にあつまり、まりと

なけてあそび居けるが、せりふし、あしき小兒、かきぞやぶりに庭にいりこみ、そのあそびに入らんとしけり。



生徒等は、これを見て、大に
 いかり、「わが學校のかきと
 やぶりと、は、我が學校と
 かるしめたるものなり」といひて、
 この生徒を、いましめさとして、
 庭よりおし出し、さらに、學校
 の正門より入らしめし、のち
 共に、こゝろよくあそびけりとぞ。

第十三課

皇御國

すめらみくにの、このころは、
 いかなる事ぞか、つとむべき。
 たゞ身に、もてる、誠心を
 君と親とに、つくすまで。

皇御國の

このころは、

たわます せれぬ ころもて、
世の なりはひと つとめ なし、
國と家ととと ます べし。

尋常國民修身篇卷一終

明治廿六年三月二十日印刷
明治廿六年三月廿三日出版



著者	赤沼金三郎	東京市本郷區元町二丁目五十番地寄留
發行者	井上蘇吉	東京市神田區錦町三丁目一番地
同	梅原龜七	大坂市東區備後町四丁目十一番地
同	井上太郎	東京市下谷區二長町三十二番地
同	酒井清藏	東京市神田區表神保町五番地
印刷者	熊田宜遜	東京市神田區錦町三丁目廿五番地
印刷所	熊田活版所	東京市神田區錦町三丁目廿五番地

